

## 研究ノート

### 「旅行者モチベーション」および「旅行経験」の基本的特性の分析 旅行者行動に関して提示した仮説の検証の試み

佐々木、土師二

Analytical study of basic dimensions of motivation and experience of tourists:

An approach to verifying the proposed hypotheses on tourist behavior

Toshiji SASAKI

#### Abstract:

This paper is aimed at testing a few hypotheses proposed by Sasaki (2000) and consists of two parts. The first part is a report of confirmatory analyses of five dimensions of tourist motivation. Factors obtained in several factor-analytical studies are re-analysed from the viewpoint of a five-dimensional structure of tourist motivation. In the second part, positive and negative travel experiences previously had by university freshmen are separately content analyzed. Their experiences are categorized into five dimensions of travel experience, and into four elements of consumer experience. In each part, the proposed hypotheses are supported.

Key words: tourist motivation, travel experience, factor-analytical study, content analysis, five-dimensional structure of tourist motivation, five dimensions of travel experiences, four elements of consumer experiences.

#### 抄 録

本稿は、旅行者行動に関して筆者（佐々木、2000）が提示した仮説の検証のための分析の結果を報告するもので、2部より構成されている。第1部では、旅行者モチベーションの5次元構造を確認するため、種々の因子分析的研究によって抽出されている因子の内容を再検討し、体系的に位置づけた。第2部では、大学生の旅行の「よい経験」と「わるい経験」について内容分析し、5次元に分類するとともに、消費経験の4特性の観点からの分析も行った。各部で、仮説を支持する結果が得られた。

キーワード：旅行者モチベーションの5次元構造、旅行経験の5次元、消費経験の4次元、因子分析的研究、内容分析。

## 序

『旅行者行動の心理学』（関西大学出版部、第1刷 2000、第2刷 2004）において筆者（佐々木）は種々の心理的・行動的仮説を提唱している（p.380参照）。

そのうちで「旅行目的地の魅力」を構成する3次元の認知的特性に関しては、すでに佐々木（2002）が西村（2002）による因子分析的研究を紹介している。つまり、大学生の海外旅行で訪問先となりうる7ヶ国のイメージをSD法で測定し因子分析をしたところ、「休養/リラックス～冒険/刺激的」および「ありふれた～独特の」という2特性は6～7ヶ国で抽出され共通次元と見ることができたが、「演出的～本物的」という特性は1ヶ国でしか抽出されなかった（佐々木、2002、p.234.）。他方、Naoi（2003）は、岡山から東京へ修学旅行に行った高校生が訪問した6地点について、佐々木（2000）が仮説した3次元を意味する形容詞対によるSD法で測定し、クラスター分析でtourist orientedとnon-tourist orientedの性質を持つ各3地点から成る2タイプに分類したうえで、それぞれで主成分分析を行った。2タイプのうちのtourist orientedの性質の訪問地点については、staged～authentic次元とordinary～unique次元が抽出されて佐々木の仮説を裏付けたが、第3次元にはrestful/relaxing～adventurous/excitingというよりもsafe～dangerousと解される特性が抽出された。他方で、non-tourist orientedの性質の訪問地点のイメージでは佐々木の3次元体系とは異なる構造が見られた。このように、佐々木（2000）の仮説の検証に際しても、各次元を測定するための適切な共通尺度が構成されていないこともあり、測定対象の「旅行目的地」の性格も異なるため、一貫した結果を得ていない。

他方で、「旅行者モチベーション」や「旅行経験」に関しては、それぞれで、①緊張解消、②娯楽追求、③関係強化、④知識増進、⑤自己拡大という内容で表される基本的特性を提示しており、さらに「旅行経験」に関しては、その消費経験としての意味合いから（a）気楽さ、（b）面白さ、（c）新しさ、（d）危うさという4特性で表すことができると考えている。しかし、これらの仮説についての実証的裏付けを提示するまでには至っていない。

そこで、本稿は、この「旅行者モチベーション」および「旅行経験」のそれぞれに関して、それを特徴づける心理的特性の構造についての裏付けを得ることを目的とした。そのため、本稿では、2部構成で、それぞれの課題についての実証的な分析結果を報告する。

第Ⅰ部では、「旅行者モチベーション」の5次元構造の検証に向けて、先行の諸研究における因子分析の結果を再検討するとともに、石澤（2003）が抽出した多面的な因子の意味づけを行う。

第Ⅱ部では、「旅行経験」に関する仮説を確認するために、筆者みずからが実施した調査で得た「よい経験」と「わるい経験」の内容分析を行い、その分類結果を考察する。

## 第Ⅰ部

### 旅行者モチベーションの5次元構造の検証のための試み

#### —因子分析的結果を再検討した二つのアプローチ—

#### I-1 問題

旅行者モチベーションの一般的枠組みとして、佐々木（2000）は、①緊張解消、②娯楽追求、③関係強化、④知識増進、⑤自己拡大という5次元を設定し、それらが「①：低次→⑤：高次」という階層を構成するという仮説を提示しているが、この仮説構成の根拠には、1970～90年に発表された10人の研究者による旅行者モチベーションの次元分析の結果を集約したFodness（1994）の機能的分類体系があり、そこで示されている(1)功利：苦痛回避、(2)功利：報酬の最大化、(3)社会的適応、(4)知識、(5)自我高揚（自我防衛）、(6)価値表出という6次元を、モチベーションの実質的内容（コンテンツ）を表すように対応づけたものであった。（ここでFodnessの(5)と(6)を合わせて⑤に対応させている。）（佐々木、2000、p.75-7.）

他方で佐々木（2000）は、旅行者モチベーションの多面的特性に関する実証的研究の内容にも触れており、そこで採用されている測定項目や多変量分析（主に因子分析）結果の多くの事例をも紹介しているが（p.38-73.）、上記の①～⑤の5次元の仮説の提唱にあたっては、これら先行研究で実証的に明らかにされている因子やその高負荷項目との対応づけを行っていない。しかし、これらの分析で見出された因子・項目レベルの具体的内容で示される旅行者モチベーションの次元が①～⑤の特性で把握できるか否かの確認が可能であったはずである。

そこで、本稿では、まず、その5次元構造の確認を行うために、次の二つの視点からアプローチを試みることにする：

(1) 佐々木（2000）が引用している先行研究のなかで旅行者モチベーションへの因子分

析的アプローチを行っている諸研究で見出されている各因子（次元）は、上記の①～⑤のモチベーション特性のいずれかに対応するという仮説を検討する。

(2) (1) で取り上げた因子分析的研究における高負荷項目のほかにも、佐々木 (2000) は、旅行者モチベーションの測定項目を示している研究事例も紹介しているが、その両方を一括した広範囲の項目に関する調査データの因子分析を石澤 (2003) が行っているところから、その分析が明らかにしている多面的な因子が上記の①～⑤のモチベーション特性に集約されるか否かを考察する。

## I-2 旅行者モチベーションの因子分析的研究で抽出されている因子の比較

### I-2- (1) 佐々木 (2000) の引用文献に見られる諸因子の対応づけ

旅行者モチベーションの因子分析的研究の結果として佐々木 (2000) が引用した先行研究のなかで、各因子の高負荷項目を示しているのは、Fodness (1994)、Lee & Crompton (1992)、Gitelson & Kerstetter (1990)、Mills (1985)、Schul & Crompton (1983) による5事例であるが (p.40-73)、それぞれで抽出されている各次元 (因子) の内容をその高負荷項目を通して対応づけるために作成したのが表 I-1 である。

表 I-1 因子分析によって抽出された旅行者モチベーションの特性の比較：  
佐々木 (2000) によって引用された5研究の因子と高負荷項目

Fodness (1994) < 5 特性 >	Lee & Crompton (1992) < 4 特性 >	Gitelson & Kerstetter (1990) < 6 特性 >	Mills (1985) < 4 特性 >	Schul & Crompton (1983) < 6 特性 >	
②功利的機能：苦痛の最小化 5. 好きな本を持って木陰で眠るだけで素晴らしい休暇のように思える。 17. 自分には、ほんの休養とリラックスするだけの休暇で十分だ。 57. 休暇とは、何もしなくてよいことだ。 58. 休暇の間は、締め切り時間があってはならない。 61. 休暇で大事なことはゆっくり行動することだ。		①リラックス指向 1-1. リラックスする。 1-2. 孤独を経験する。 1-3. すべてから遠ざかる。 1-4. 再充電する。 1-5. 何もせずにいられる。 1-6. 緊張をほぐす。 1-7. プライバシーをもつ。 1-8. 日常から逃げる。 1-9. せき立てられない。		b. 快適性 (A) 2. 最高の休暇は、リラックスできてほかに何もせずに過ごせることだ。	I
⑤功利的機能：報酬の最大化 10. 休暇の間に、普通では見られないものを見たいものだ。 22. 自分には、いつも行きたいと思っているところがある。 38. とにかく旅行がしたい。どこかへ行って、何かをしたい。	③退屈緩和 3a. 私は、退屈感をなくするような旅行がしたい。 3b. 私は、休暇では、型にはまらない時間を次々に過ごすようにしたい。 3c. 私は変化のない日常的な仕事に退屈しているので、旅行したい。	③興奮指向 3-1. 刺激的なことをする。 3-2. 楽しさを感じる。 3-3. 特別なことをする。 3-4. 糞沢を経験する。 3-5. 気ままになる。 2-4. 景色を眺める。	①自己実現 (A) 18. 景色を楽しむ。 12. 自然に近づく。	b. 快適性 (B) 5. 休暇では最高の場所に滞在することが重要だ。 4. 一番良い休暇はいろいろなナイトライフを楽しむものだ。	II-1

「旅行者モチベーション」および「旅行経験」の基本的特性の分析 (佐々木)

<p>③価値表出機能：自尊 13. 休暇では、贅沢をして、美味しいものを食べ、快適な場所に滞在したい。 26. 休暇地を選ぶ時、よいレストランと美味しい食べ物があることが重要だ。 34. 休暇で、どんな施設を利用できるかは、本当に重要なことだと思う。 53. 休暇では、どこかファシヨナルなところへ行くことが大事だ。</p>		<p>⑤その他(1) 5-1. 美味しいものを食べる。 5-2. ショッピングに行く。</p>			II-2
		<p>④社会性指向 4-1. 友達を訪問する。 4-2. 慣れた場所を人にも体験させてあげる。 4-3. 気に入っている休暇地を再訪問する。 4-4. 家族と一緒に過ごす。  ⑥その他(2)(A) 6-1. 新しい人と出会う。</p>	<p>④安全(A) 15. このスキーヤーは思いやりのある行動をする。 3. ここではスキーヤーがお互いに丁寧だ。  ③親和 17. 友達に自分の技術や知識を分け与える。 23. 他人のスキー技術が上達するように援助する。 8. 家族が融和できるように努める。 14. 友達とか家族の一人の相手をする。 2. 家族みんなで一緒に何かする。 19. 自分の仲間と何かする。</p>	<p>c. 親しみ/便利さ 14. 同じ言葉を人々が話しているところを訪れたい。 15. 休暇で行くのは、子どもをたっぷり楽しませてくれるところだ。 8. 私の友達が以前訪れたところには是非行きたいと思う。</p>	III
<p>①知識機能 16. 別の文化や違った生き方を自分で経験することは重要だ。 40. 休暇の間に家では経験できない文化的行事に参加する。 42. 外国の文化を訪れることが好きだ。 56. 他の人々の生き方を見るのが好きだ。 59. 休暇では、その地の人々と同じことをしたい、つまり「郷に入れば…」</p>	<p>②日常性からの変化 2a. 私は、新しいことを探索できるようなところに自分が見たいと思う。 2b. 私は、休暇では、新しい変わったことを経験したいと思う。 2c. 私は、休暇では、自分の環境にあるのとは違う風習や文化を経験したい。 2d. 私は、休暇では、何か新しいことを経験させてくれる環境変化を楽しむ。 2e. 理想の休暇は、私がこれまでに見たこともないものが見られることだ。 2f. 休暇の一部分には新しいことを発見する感じがあってほしい。 2g. 私は、冒険的なところへ旅行したい。 2h. 私は、休暇では、未知のものを探索したいという衝撃を感じる。</p>	<p>①探求指向 2-1. 新しいことを学ぶ。 2-2. 興味ある光景をみる。 2-3. 新しい場所を探索する。 (2-4. 景色を眺める。)</p>		<p>a. 文化的関心 9. 旅行の内容で最高なのは、新しい文化や新しい生き方に触れることだ。 7. 地方の人々と交わり地方の風習を経験するのが好きだ。 6. 古い遺跡や歴史的な建物がある国を訪れるのが好きだ。 12. 仕事のことで役に立ったことを学べたところを訪問したい。  f. 知識探求者 11. ほとんどの友達が、外国のどの国へ行くのがよいか助言を求めにくる。 12. 仕事のことで役に立ったことを学べたところを訪問したい。</p>	IV
		<p>⑥その他(2)(B) 6-2. 自分自身を知る。</p>	<p>②自尊 5. スキーが上手になる。 10. 自分の技術と能力を高める。 21. 友達と型にはまらない競争をする。  ④安全(B) 6. 自分の身体の型を保つようにする。 1. 身体の健康がよくなるようにする。 11. 練習する。</p>		V-1

	<p>①スリル</p> <p>1a. 私は、休暇では、少々きょつとするようなことを時々したいと思う。</p> <p>1b. 私は、休暇では、挑戦的なことをするのを楽しんでいる。</p> <p>1c. 休暇では、少々びっくりさせられるようなことが面白い。</p> <p>1d. 私は、休暇では、危険な感じを経験するのを楽しんでいる。</p> <p>1e. 私は、春の水の多い時期に、自然の河川の真ん中で筏に乗りたと思う。</p> <p>1f. 私は、スリルのある活動を楽しむ。</p> <p>1g. 私は、休暇では、冒険を求める。</p>		<p>①自己実現 (B)</p> <p>13. エクスタシー (無我夢中) の感じを経験する。</p> <p>20. 創造的なことをやり遂げたいという感じを経験する。</p> <p>16. 心が浮き立つ気分を経験する。</p> <p>4. 自由な感じを経験する。</p> <p>9. 心と体が調和を保って発達している。</p> <p>22. 孤独を感じる。</p> <p>7. 壮大な景色を眺める。(18. 景色を楽しむ。)(12. 自然に近づく。)</p>	<p>d. 活動性</p> <p>3. 休暇では、珍しいことをして、普段の生活から離れる機会を持ちたい。</p> <p>13. 休暇中にできるだけ多くのことを試してみたい。</p> <p>16. いろんな活動や景色がある場所を訪れるのが好きだ。</p> <p>(2. 最高の休暇は、リラックスできて、ほかに何もせずに過ごせることだ。)</p>	V-2
<p>④価値表出機能：自我高揚</p> <p>2. 休暇中での経験を家で思いだしてその話をするのが好きだ。</p> <p>9. 家に帰ってから、自分の休暇のことを誰にでも話す。</p> <p>24. 休暇で訪れた場所や見たことの話ができるのが好きだ。</p>					V-3
	<p>④驚き</p> <p>4a. 私は、予期しないことが起きるように休暇の細かい計画は立てない。</p> <p>4b. 私は、予想できないような休暇が好きだ。</p> <p>4c. 私は、事前の計画ルートは一切考えない旅行に出かけたいと思う。</p>			<p>e. オビニオン・リーダーシップ</p> <p>10. 旅行するとき、観光の日程や宿泊施設を自分で計画するのが好きだ。</p> <p>1. 海外旅行をするときは、ガイド付きの旅行がよい。</p>	VI

これらの研究の因子分析結果の対応づけは、抽出された因子に高負荷を示す項目によって行っているが、その解釈にあたる因子名を見ただけでは対応関係が危ぶまれるケースがあるのは事実である。それは、分析結果として報告されているなかで「因子名」が高負荷項目の内容を適切に表しているとは考えられない場合があるため、そこには研究者による因子解釈での特定の視点が強く反映されている可能性がある。しかし、この表 I-1 では、因子名は原典通りにしたうえで、各因子の対応づけは高負荷項目の内容にできるだけ忠実に従った形をとっている。そして、対応づけられる因子が抽出されていない場合には空欄にしており、また、原典では 1 因子として報告されていても、この表 I-1 の対応づけでは項目内容によって分離させたほうがよいと思われる場合には、因子名に (A) または (B) の記号を付して、異なる場所に位置づけている。

### I-2-(2) 5つの区分とその意味づけ

この表 I-1 で示した集約結果によれば、5 研究で見出されている計 25 因子は、その内容によって I～VI に区分され、そのうち II は 2 分され、V は 3 分される。

そして、各区分が表す内容は総括的に次のように解釈することができる：

I：リラックス

II：楽しさ [II-1：一般的目的、II-2：具体的選択対象]

III：人間関係

IV：知的探求

V：自己拡大 [V-1：自己成長、V-2：自己高揚、V-3：自己顕示]

VI：意外性 vs. 計画性

この結果は、I～Vが前述した①～⑤の旅行者モチベーションの5特性にそれぞれ該当することを示している。他方、VIは、「驚き」と「オピニオン・リーダーシップ」の2因子に関連する区分であるが、その内容は、前者が「意外性」を、後者が「計画性」を意味していると理解され、主に「旅行手段の選び方」に関するものであるため、その「手段選択」の結果がどのようなモチベーションを満たすことに結びつくのか、問うことになる。

このように、先行研究における因子分析結果を集約した本分析から、佐々木（2000）が仮説している「旅行者モチベーションの5次元の設定」を支持する知見を得ることができたと言える。

### I-3 旅行者モチベーションの多面的特性の抽出とその集約

#### I-3-（1）石澤（2003）による10因子とその5区分

石澤（2003）は、前節I-2で取り上げられた5研究で用いられた測定項目に、因子分析を行っていない実証分析として佐々木（2000）が引用している4研究（Shoemaker, 1989；Pearce, 1988；Krippendorf, 1987；Guinn, 1980）で採用されている項目を加え、これら9研究で用いられているきわめて多数の項目のなかから選定した代表的項目に関する因子分析的研究を行った。

調査は、大学生の「海外旅行のモチベーション」の特性を幅広くとらえることを目的として、9研究合わせると200以上にも及ぶ項目のなかから、重複しているものや大学生に回答を求めるのには必ずしも適切でないものを除き、語句などの表現に配慮した一義的な短文形式のものに修正して、最終的に65項目を設定した。そして、大学生140名（男性63名、女性77名）を対象者（有効サンプル数）として「1週間から2週間の海外旅行に行くとき、各項目をどの程度重視するか」という趣旨の質問で、「1. 重視しない～5.

重視する」の5段階評定による回答を求めた。質問紙の構成にあたり、65項目が順逆の2通りで提示されるように2セットを準備し、それぞれ70名から回答を得た。

項目内容が非常に広い範囲に及んでいるので、因子分析における因子数の決定では探索的な試みを行った。つまり、主因子法の繰り返しで共通性を推定し、スクリープロットと分散説明力を参考に因子数を5、7、10、13とする4種類のプロマックス解を求め、これらの解の間で単純構造化と因子解釈の比較検討を行い、最適解として10因子解を採用した。この10因子で説明される分散は50.6%であった。

その10因子解で負荷量0.400以上の高負荷を示す項目と、それにもとづく因子解釈を示したのが表I-2である。この表I-2では、各因子の高負荷項目だけでなく、それ以外の項目も3タイプ(①~③)に分けて示し、石澤が、この調査で用いたすべての項目を表示するようにしている。

表I-2 石澤(2003)による旅行者モチベーションの因子分析結果(因子負荷量0.400以上を示す)

第1因子(因子解釈=リフレッシュ)7項目	
16. 身体が健康がよくなるようにする(.821).	33. 体力を回復する(.678).
13. きれいな空気や水を求める(.676).	53. 汚れた環境から脱出する(.646).
54. のんびりとくつろぐ(.539).	19. せき立てられない(.428).
58. 快適な場所に滞在する(.416).	
第2因子(因子解釈=自由と新経験)9項目	
25. 型にはまらない時間を過ごす(.629).	55. 新しいものを見る(.628).
23. 決まりきった毎日の生活からぬけだす(.623).	22. 普段では出来ない経験をする(.574).
28. 別の文化や違った生き方に触れる(.567).	32. 面白いところを見る(.501).
30. 自由な感じを経験する(.496).	14. 自由時間が利用できる(.479).
21. 気晴らし(.403).	
第3因子(因子解釈=自己成長)6項目	
43. 自分自身を知る(.686).	39. 知的な豊かさを求める(.617).
5. 自己学習の機会を持つ(.580).	56. 内省したり考えるための時間を持つ(.544).
46. 自己充実感や達成感を持つ(.535).	45. 孤独を楽しむ(.473).
第4因子(因子解釈=景観の賞美)5項目	
9. 興味ある光景を見る(.753).	8. 外国の珍しい自然に触れる(.741).
17. 景色を楽しむ(.698).	1. 美しい自然景観を見る(.549).
11. めったに行けない最高の場所に滞在する(.478).	
第5因子(因子解釈=家族で楽しむ)8項目	
60. 旅先で友達や家族と何かをする(.610).	20. 海外で、大勢でにぎやかに過ごす(.598).
6. ショッピングに行く(.545).	49. 自分の視野を広める(.527).
40. いろいろな娯楽をする(.508).	65. 気分を高ぶらせる(.496).
48. 興奮する(.462).	34. 海外で、家族と一緒に過ごす(.400).
第6因子(因子解釈=新たな交流)5項目	
51. 旅先で見知らぬ人と交流する(.746).	63. 日本では交流できない人々に接触できる(.718).
26. 旅先で知り合った人と一緒に何かを見たり、したりする(.652).	
62. レクリエーション活動をする(.501).	



「旅行者モチベーション」および「旅行経験」の基本的特性の分析 (佐々木)

50. 旅行先の土地の郷土色豊かな行動 (工芸品つくりなど)に参加する (.480).
- 第7因子 (因子解釈=自己高揚) 5項目
31. スリルのある活動を求める (.688). 35. 危険を冒す (.586).
38. 無我夢中の感じを経験する (.496). 44. 探検する (.450).
10. 積極的にスポーツする (.415).
- 第8因子 (因子解釈=行事参加) 2項目
42. お祭りや特別イベントに行く (.673). 24. 文化的行事に参加する (.551).
- 第9因子 (因子解釈=文化鑑賞) 2項目
18. 美術館を訪れる (.700). 47. 博物館や遺跡を訪れる (.651).
- 第10因子 (因子解釈=私生活確保) 2項目
64. 海外で、自分の趣味の時間を持つ (.571). 57. プライバシーを持つ (.411).
- その他の項目
- ① (2因子に負荷量.400以上を示す2項目)
37. 心が浮き立つ気分を経験する (第1因子に.468; 第8因子に-.453).
59. 普通では見られないものを見る (第8因子に.471; 第2因子に.443).
- ② (特定因子に負荷量.399~.300を示す7項目)
2. 言葉が通じること (第1因子に.374). 61. 雑踏から離れる (第1因子に.383).
15. 世界を見る (第2因子に.325). 27. 素晴らしい記憶を作る (第2因子に.351).
36. 何もせず、エネルギーを消費しない (第2因子に-.383)
49. 自分の視野を広める (第3因子に.373).
2. 美味しいものを食べたり飲んだりする (第5因子に.364)
- ③ (負荷量.300以上を示す因子がない5項目)
3. あちこち動き回る. 4. 珍しいことをする機会を持つ (第3因子に.278).
7. ガイドが付いている. 41. 海外の親戚や友人に会う.
52. 気ままになる.

抽出された因子は、予想通りに、非常に広範囲の内容に及ぶものであって、前節 I-2 の表 I-1 に示している因子分析結果のどれよりも多面的に旅行者モチベーションの諸特徴を表している。ちなみに、各研究での抽出因子の因子名だけを掲げた表 I-3 を見ると、仮説的に設定した I~V の5次元のそれぞれに、石澤が抽出した10因子のうちの2因子が関連していることが分かる。

表 I-3 佐々木 (2000) が引用している5研究における旅行者モチベーション次元と石澤 (2003) の因子分析結果との比較: 因子レベルでの対応づけ

	Fodness (1994) < 5 特性 >	Lee & Crompton (1992) < 4 特性 >	Giteison & Kerstetter (1990) < 6 特性 >	Mills (1985) < 4 特性 >	Schul & Crompton (1983) < 6 特性 >	石澤 (2003) < 10 特性 >
I	② 功利的機能: 苦痛の最小化		① リラックス指向		b. 快適性 (A)	① リフレッシュ ⑩ 私生活確保
II-1	⑤ 功利的機能: 報酬の最大化	③ 退屈緩和	③ 興奮指向	① 自己実現 (A)	b. 快適性 (B)	④ 景観の賞美 ⑧ 行事参加
II-2	③ 価値表出機能: 自尊		⑤ その他 (1)			
III			④ 社会性指向 ⑥ その他 (2) (A)	④ 安全 (A) ③ 親和	c. 親しみ/利便さ	⑤ 家族で楽しむ ⑥ 新たな交流

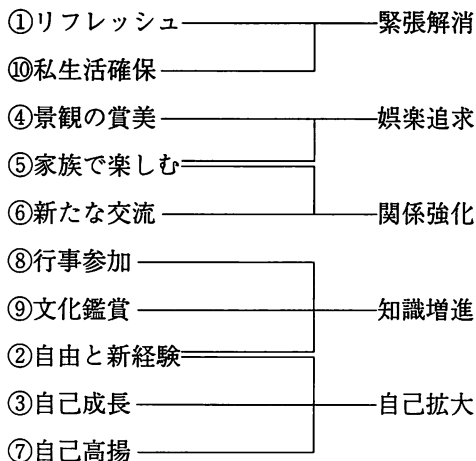
IV	①知識機能	②日常性からの変化	②探求指向	a. 文化的関心 f. 知識探求者	⑨文化鑑賞
V-1			⑥その他(2)(B)	②自尊 ④安全(B)	②自由と新経験
V-2		①スリル		①自己実現(B)	d. 活動性
V-3	④価値表出機能： 自我高揚				③自己成長 ⑦自己高揚
VI		④驚き		e. オピニオン・ リーダーシップ	

ただし、前掲の表 I-1 では内容的な違いが比較的是っきりしている II-1 と II-2 の間の区別があまり明瞭でない。また V-3 に対応する因子は認められないが、これは、石澤の項目バッテリーのなかでは項目 27 (素晴らしい記憶をつくる) だけが関連する内容であるために、因子として独立できないのであろう。また、本来の 5 次元体系から離れていると考えている区分 VI (意外性 vs. 計画性) に関連する項目は 1 項目 (7. ガイドが付いている) だけなので、独立した次元を構成するに至っていない。

### I-3-(2) 旅行者モチベーションの 5 次元体系との関連づけ

石澤 (2003) の因子分析による 10 因子は、このように、先行研究における抽出因子の 5 区分 (I~V) をカバーしている。そのため、佐々木 (2000) が仮説的に示している 5 次元に対応するものであることが伺えるが、あらためて、両者の関連を示すと次のようになる：

[石澤 (2003) の 10 因子] [佐々木 (2000) の 5 次元]



このように、石澤 (2003) の分析が示している多面的な因子が 5 次元構造のなかで理解

できることが明らかにされた。

#### I-4 まとめ

佐々木（2000）が引用していた各研究で明らかにされていた旅行者モチベーションの因子構造では、表 I-1 に示しているように、それぞれの因子は限定的な内容を示すものであり、仮説的に設定している5次元のどれかに対応しているものの、抽出されている因子の数の問題もあり、5次元すべてを包括的にカバーしている研究はなかった。しかし、5つの研究の結果を横断的に見ると、その内容にはI～Vの幅があって、いわば相互補完的に旅行者モチベーションの5次元構造を浮かび上がらせることになっている。他方、石澤（2003）の研究で抽出された10因子は多面的な内容をカバーしており、それらを整理すると旅行者モチベーションの5次元のすべてに対応づけられる因子を含んでおり、佐々木（2000）が示している仮説的構造を支持するものであった。

こうして、相互に異なる二つの方向からのアプローチの結果が、ともに、旅行者モチベーションの5次元構造を確認させるものであったことは、この5次元が旅行者モチベーションの基本になるものと理解できることを示している。

## 第Ⅱ部

### 旅行経験に関する仮説的次元の確認のための調査研究 —大学生における「よい経験」と「わるい経験」の内容分析—

#### Ⅱ-1 問題

##### Ⅱ-1-（1）旅行経験の5次元

旅行者が訪問地（旅行目的地）でどのような活動や経験をしたかという行動の内容をとらえることは、訪問地の魅力を構成する要素を把握することに通じるだけでなく、旅行者のモチベーションがいかに満たされたかという問題へアプローチしたり、旅行後の評価や満足の根拠や条件を明らかにするためにも、重要である。

訪問地における旅行者の活動・経験の内容について、佐々木（2000）は、次の5タイプの行動に集約できるという考えを示し（p.187ff.）、また、この5次元の設定の一般的妥当性を検証することが必要であると述べている（p.249）。

- ①緊張解消行動：日常の仕事や生活から生じるプレッシャーや責任から一時的に逃避してリラックスする行動で、わずらわしい人間関係から逃れたり、のんびり観光したり、休養・保養・健康回復などを意図するもの。
- ②娯楽追求行動：レクリエーションや楽しみを求める行動で、娯楽、ロマンス、スポーツ、芸術、趣味、小さな冒険・挑戦などが含まれる。
- ③関係強化行動：友人・知人を訪問する、家族や親戚縁者とのつながりを強める、祖先のルーツを探る、新しい人々と知己になるなど、社会的な人間関係を拡大したり強化する行動。
- ④知識増進行動：歴史・自然・文化・宗教・経済・産業などの諸側面で訪問先の社会や生活について、理解を深める行動や新しい知識を得るための行動。
- ⑤自己拡大行動：自己発見や自己評価につながる行動、自信や自尊の感情を生み出す行動、高い地位・威光・特権などを味わうための行動を指し、旅行後にその行動経験を誇示したり吹聴することも含む。

さらに佐々木（2000）は、これら5次元は、旅行者モチベーションを訪問地で満たそうとする行動であるところから、本稿の第I部で問題にしているように、それらが旅行者モチベーションの特性（コンテンツ）を表すとも考えている。そして、マズロー（Maslow, A., 1954）の欲求階層説を援用して旅行者モチベーションを理解しようとするPearce, P. L. (1982)らの立場にならない、これらの次元を「低次→高次」の順に配列すれば「①緊張解消→②娯楽追求→③関係強化→④知識増進→⑤自己拡大」と位置づけられるという仮説を示している（p.78）。その上、このような「訪問地における旅行者の活動・経験」の各次元が実行できたか否かによって「旅行後の評価・満足」が影響されることが想定できるところから、旅行経験とその特性内容は、旅行者行動プロセスのなかで非常に重要な機能的な概念であると考えている。

## II-1-(2). 旅行での「よい経験」と「わるい経験」の分析

本稿では、まず、「訪問地における旅行者の活動・経験」に関する5次元体系が実証的に裏付けられるか否かを検討する。

このような課題意識に直接的に関連する先行研究として、Pearce（1982, p.123ff.）およびPearce & Caltabiano（1983）が報告している調査分析の事例がある。これら二つの分析事例は共通の調査データに依拠しているものであるが、Pearce（1982）が旅行経験の内容の「質」的側面に焦点を当てた記述をしているのに対して、Pearce & Caltabiano（1983）は、

その内容分析をふまえてカテゴリー化された旅行経験の次元レベルでの「量」的分析を行っている。

#### **(Pearceらの「旅行経験」データの収集方法)**

研究の目的は、基本的には「旅行者経験の質的側面」を示すことにあるので、異なるタイプの多くの旅行をしている旅行者から回答を得るために、2組の対象者に対する調査が行われた。まず「高経験グループ」として、旅行研究者の団体であって主に北米人によって構成されているAmerican Travel Research Associationの会員から600人を抽出して自由回答式質問紙（open-ended response form）を送付し、110人（その75%がアメリカ人とカナダ人）から回答を得た。他方「低経験グループ」として、オーストラリアのクイーンズランド州タウンズビル市にある大学のクラスで44人の学生を対象に、各人が質問紙に回答するとともに、各人がもう1人の知人（大学生でない非専門家の人）にも回答してもらうように依頼し、合わせて88人（その91%がオーストラリア人）から回答を得た。

この調査では、次のインストラクションで自由回答が求められた：

「用紙の下半分のスペースに、あなた自身の休暇の経験から“よい経験（positive experience）”と“わるい経験（negative experience）”をそれぞれ一つずつ書いてください。また、その経験があった国と場所を具体的に書き、そこで過ごした時間、その経験についてのあなたのフィードバック（感じ）も書いてください。」

そして、高経験グループには「よい経験」と「わるい経験」のそれぞれの例文（英文で各90語程度）が示されたが、低経験グループにはそうした例文は示されなかった。しかし、両グループとも、多くの回答は詳細で、上品で、熱心に書かれたものであり、この調査で求めているものが何かがよく理解されていたと判断できた。

各グループには性別・年齢別構成や海外旅行経験（訪問経験のある外国の数）で大きな片寄りがあるので、分析は、両グループを合わせたデータで行われた。合わせて198人の回答者から400以上のエピソード（経験内容）が報告された。

#### **(Pearceらの「旅行経験」の分類方法)**

こうして自由記述式に収集された旅行経験のエピソードについて、「よい経験」と「わるい経験」のそれぞれで、そのなかのポイントとなる出来事が何か識別され、マズローの欲求階層説が述べている5段階に分類された。その際、「よい経験」については「その経験が満たす欲求は何か」という観点からとらえられた。たとえば「よい食べ物や飲み物」「太陽」「リラックス」などを強調している場合には「生理的欲求」を満たすものとされ、「快適感」や「安全感」が述べられている場合には「安全欲求」に関するものと分類された。

また「緊密な人間関係」「家族の紐帯の強化」「訪問先コミュニティとの意義のある接触」などに触れているものは「愛と所属の欲求」のカテゴリーに入れられた。さらに「自己イメージの改善」を含むものは「自尊欲求」に、「個人的充実」に関連する場合には「自己実現欲求」に、それぞれカテゴライズされた。他方、「わるい経験」については「その経験はどんな欲求を阻害したり充足させなかったか」という観点から分類された。たとえば、「わるい食事」「宿泊施設の難点」は「生理的欲求」に、「安全不足」「襲いかかられること」は「安全欲求」に、「人間関係上の難点や心配」は「愛と所属の欲求」に、「自尊心を傷つけられる」は「自尊欲求」に、「自己実現的目標を否定する」は「自己実現欲求」に、それぞれカテゴライズされた。

このようなエピソード分類の結果、「よい経験」では「自己実現欲求」に関連するエピソードがもっとも多く（35%）、「愛と所属の欲求」に関連するものもほぼ同じ程度（33%）で、「生理的欲求」に関連するものが3番目（27%）であった。他方、「わるい経験」では「安全欲求」（43%）に関するものがとくに多く、以下「生理的欲求」（27%）、「愛と所属の欲求」（17%）、「自尊欲求」（12%）の順であって、「自己実現欲求」に関連するものは僅か1%に過ぎなかった。

Pearce（1982）らのエピソード分類は、マスローの欲求階層説にもとづく5段階カテゴリーによるものであるが、佐々木（2000）は、上述のように、マスロー説と同じカテゴリー（欲求タイプ）を取り入れているわけではない。そこで、旅行者の「よい経験」や「わるい経験」の分類は、本稿第Ⅱ部の冒頭で述べた「訪問地における旅行者の活動・経験の内容」の5次元に依拠するので、その次元設定の妥当性を検討することになる。

## Ⅱ-2 方法

### Ⅱ-2-（1）調査の実施方法

#### （1）調査状況

関西大学社会学部産業心理学専攻の1年次生の必修科目として「心理学総合研究」が設置されており、専攻所属の専任教員が分担して各自の研究領域や取り組んでいる課題をオムニバスの講義しているが、平成16年7月2日に筆者（佐々木）が「消費者心理の分析：とくに旅行者行動に焦点を当てて」というテーマで「旅行者行動の心理学的研究」の概略を述べる機会を得たので、その講義時間の最後に、出席票（学籍番号、氏名、性別の記入

を求める。)に加えて質問事項を印刷したアンケート形式の調査を行った。出席者(回答者)は230名(女性152名、男性78名)であった。

(2) 調査内容

質問は、旅行での「よい経験」と「わるい経験」の内容についての自由記述を求めるもので、回答者の半数は「よい経験」について回答した後に「わるい経験」について回答するように計画されており、他の半数はその逆順(わるい経験→よい経験)で回答するようになっていた。「よい経験」についての質問は次の通りである：

問 あなた自身の旅行の経験(思い出)のなかで「**一番よい経験**だった」と思うものについて、次の項目に答えてください。

- (1) その「**一番よい経験**」の内容はどんなことですか。できるだけ具体的に、下の空白に自由に書いてください。[自由記述のためのスペースを設ける.]
- (2) その旅行は「国内旅行」ですか、「海外旅行」ですか。当てはまる方に○をしてください。
 

1. 国内旅行→	その旅行の目的地(行き先)はどこですか。下の空白に記入してください。[自由記述のためのスペースを設ける.]
2. 海外旅行→	
- (3) その旅行には誰かと一緒に行了きましたか。次のなかで当てはまるものに○をしてください。
 

1. 一人で	2. 家族と	3. 同年輩の友人と	4. 学校のグループで
5. 地域や近所の人と	6. 職場・アルバイト先と人と	7. その他	

他方「わるい経験」についての質問は、上記で太字で示されている「**一番よい経験**」という表現が「**一番わるい経験**」に変えられただけで、他の質問・回答内容は同一であった。

II-2-(2) 「よい経験」と「わるい経験」につながる旅行の形態

(1) 回答された「旅行経験」の国内vs.海外旅行の比較

「よい経験」および「わるい経験」について、質問(2)による国内旅行と海外旅行の回答者数は次の通りである：

	よい経験			わるい経験			(対象者数)
	国内	海外	無記入	国内	海外	無記入	
女性	114	35	3	112	24	16	(152)
男性	63	14	1	61	8	9	(78)
合計	177	49	4	173	32	25	(230)

(2) 回答された「旅行経験」における同行者のタイプ

国内旅行または海外旅行での「よい経験」あるいは「わるい経験」が報告された場合で

の、質問（3）による同行者タイプ別の回答者数は次の通りである：

	よい経験						わるい経験					
	国内旅行			海外旅行			国内旅行			海外旅行		
	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計
1. ひとりで ……………	1	3	4	0	0	0	1	2	3	1	0	1
2. 家族と ……………	29	14	43	10	4	14	54	24	78	10	5	15
3. 同年輩の友人と ……………	33	16	49	4	2	6	10	13	23	1	0	1
4. 学校のグループで ……………	49	25	74	15	4	19	39	17	56	7	2	9
5. 地域や近所の人と ……………	0	0	0	1	0	1	1	2	3	0	0	0
6. 職場・アルバイト先の人と	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
7. その他 ……………	1	3	4	5	4	9	5	0	5	3	1	4
回答なし ……………	0	2	2	0	0	0	2	3	5	1	0	1
合計 ……………	114	63	177	35	14	49	112	61	173	24	8	32
(2+3+4) %	97.4	87.3	93.8	82.9	71.4	79.6	92.0	88.5	90.8	75.0	87.5	78.1

## II-3 分析と考察

### II-3-（1）本調査における「よい経験」と「わるい経験」のとらえ方

#### （1）経験内容の自由記述と関連調査事項

本調査で、これまでの旅行のなかで「一番よい経験」や「一番わるい経験」についての記憶が自由記述された文章は30～60字程度のもものが多く、Pearce (1982, p.130ff.) が例示しているエピソード（英文90語程度）よりも文字量が少ない短文である。一部には「よい、わるい」のどちらか判然としないものもあった。また、概して、「わるい経験」の記述は、「よい経験」の記述よりも短くて、無記入も多く、「わるい経験はありません」という回答も少なくなかった。（「よい経験」の記憶と「わるい経験」の記憶との機能的な差異が関係しているのであれば、それ自体が心理学的課題になる。）

「よい、わるい」のそれぞれで報告されている経験が生じた旅行が「国内旅行か、海外旅行か」を尋ね、さらに、その「目的地（行き先）」の具体的な場所の記入を求めた。「国内旅行か、海外旅行か」では、前項II-2-（2）で示しているように、「よい経験」でも「わるい経験」でも「国内旅行」について述べたものが75%強を占め、この割合は女性よりも男性でやや高かった。

また、国内または海外への旅行での同行者のタイプ（旅行形態）を7カテゴリーで質問した結果は、前項II-2-（2）のように、「よい経験」では「学校のグループで」が多く、「わるい経験」では「家族と」が多かった。この2カテゴリーのほかに「同年輩の友人と」



と答えたものが「国内旅行」ではとくに多くて、これら3カテゴリーで回答者の大部分を占めていた。つまり、該当者全体の結果を見ると、3カテゴリーを合わせると、「よい経験」では、「国内旅行」の94%、「海外旅行」の80%を占めているが、いずれも女性のほうがやや高率であり、また「わるい経験」では、「国内旅行」の91%（女性のほうが高率）、「海外旅行」の78%を占めていた。

「学校のグループで」と回答された場合には、それが「(高校・中学での)修学旅行」を指しているのを読みとれることが多いが、この調査の対象者が大学入学後3カ月しか経過していないという时期的な特殊事情が関係している可能性がある。「目的地(行き先)」についても同様で、「海外旅行」が「よい経験」で21%、「わるい経験」で14%あるが、この数字も、「大学1年の夏休み後」にこの種のデータを得るならば、それぞれ、もっと高率になることが想像される。

この調査時期の問題は、自由記述されている「経験内容」にも関連するであろう。その経験内容は、個人的な旅行の機会が増えるにつれて多様化し豊富になっていくことが予想される。そうした経験内容がいかに変化するかは、Pearceら（Pearce, 1982; Pearce & Caltabiano, 1983; Pearce & Moscardo, 1985）が注目している「旅行におけるモチベーション・キャリア（＝旅行キャリア travel career）」との関連で、興味ある検討課題になるだろう（参考：佐々木, 2000. p.238ff.）。

## （2）経験内容の分類方法

この分析では、「よい経験」と「わるい経験」を別々に取り扱うこととし、「国内旅行」についての「女性」（「よい経験」114人、「わるい経験」112人）による自由記述の内容を検討することにする。そのために、まず、次の手続きを経た：

- ①各回答者の自由記述文の内容の要点を読みとり、具体的な「項目」にする。内容が単一でない場合には複数の項目に振り分ける。[小分類＝経験項目]
- ②具体的な項目を同類の内容にグループ化する。[中分類＝経験クラスター]
- ③同類の内容による経験クラスターを、佐々木（2000）が仮説している「旅行者の活動・経験」の5タイプの行動に分類する。[大分類＝カテゴリー]

この手続きによって整理した旅行経験を、「よい経験」と「わるい経験」のそれぞれで一括して示したのが表Ⅱ-1である。ここに示されている自由記述の数は、「よい経験」では111人（114人から「意味不明」の回答者3人を除く。）から得た139件、「わるい経験」では108人（112人から「意味不明」の回答者4人を除く。）から得た110件である。（それ

それぞれ複数項目に関連する回答があり、それを各項目に振り分けて分類しているため、自由記述総数は回答者総数よりも多いが、表Ⅱ-1 および本文内では「当該項目の内容の自由記述をした人の数」という意味で「人数」と称している。

表Ⅱ-1 大学1年生(7月時点)の旅行経験における「よい経験」と「わるい経験」

[註] 中分類(クラスター)のカッコ内、および項目末尾の( )内の数字は人数。

(1) 一番よい経験(positive experiences): 女性の「国内旅行」の場合

カテゴリ-1 (のんびりする。自然にふれる。よいサービスを受ける。) →緊張解消

(のんびりする: 4)

温泉に行つてのんびりといろんな話ができ(1)

(九州の)温泉巡りをした(1)

(登別で)温泉や時代村へ行った(2)

(きれいな風景: 6)

海がきれいだった(2)

きれいな星空を見た(3)

きれいな景色を見た(1)

(自然にふれる: 9)

自然にふれた(8)

新鮮な野菜を採ったり食べたりした(1)

(サービスがよい: 5)

宿舎の施設やサービスがよかった(5)

カテゴリ-2 (美味しいものを食べる。楽しいことをする。珍しいことをする。) →娯楽追求

(美味しい食べ物: 14)

食べ物が美味しかった(14)

(野外で楽しむ: 4)

海辺でバーベキューをした(1)

夜遅くまでキャンプファイアーをした(1)

ゲームをしたり花火を見たりした(2)

(スポーツを楽しむ: 17)

魚釣りをした(1)

海で泳いだ(2)

シュノーケリングやスキューバダイビングをした(2)

スキーやスノーボードを楽しんだ(9)

ボート遊びをした(2)

カヌーと乗馬をした(1)

(ラフティングをする: 2)

ラフティング体験をした(1)

ラフティングをして激流に飛び込まされた(1)

(買い物を楽しむ: 4)

アトラクションや買い物を楽しんだ(4)

(自分でつくる: 3)

陶芸をしたり指輪を作った(1)

バターづくりをした(1)

自分たちでご飯をつくった(1)

(レンタカーをする: 1)

レンタカーを借りて旅行した(1)

(レジャーランドへ行く: 5)

- 東京ディズニーランドへ行った（4）
- 遊園地へ行った（1）
- （よいマチ風景：2）
- 都市とはまったく違う空間を楽しめた（1）
- 町並みが印象的だった（1）

**カテゴリー 3（ひとと親しくなる。人間関係を強める。交流を広める）→関係強化**

- （友達と一緒にいく：9）
- 親しい友達と一緒にいった（9）
- （友達と親近感を増す：21）
- 友達と一緒に過ごして親近感を強めた（21）
- （先輩と連帯：2）
- 先輩たちとの連帯感が強くなった（2）
- （家族関係を強化：3）
- 家族との交流を深めた（2）
- 父と旅行し思い出をつくった（1）
- （年長者の話を聞く：1）
- 年上の人たちからいろいろな話を聞くことができた（1）
- （訪問地の人と交流：3）
- 行き先（現地）の人たちと話し合った（2）
- 行き先（現地）の人たちが優しかった（1）
- （知り合いになる：3）
- それまで知らなかった人と親しくなった（3）

**カテゴリー 4（訪問地について学習する。新しい知識を得る。）→知識増進**

- （訪問地を知る：2）
- 現地の文化や歴史を学んだ（2）
- （本物に接する：2）
- お寺で数十年に1回しか公開されないご本尊を見た（1）
- 博物館でアンモナイトの宝石化した化石を見た（1）
- （戦争を学ぶ：2）
- 戦争時代の防空壕を見学した（1）
- その土地で特攻隊の人たちが生きて戦っていたことを知った（1）

**カテゴリー 5（主体的に行動する。達成感を得る。非日常的な経験をやる。）→自己拡大**

- （自由に振る舞う：2）
- 友達といろんな場所を自由に回り楽しんだ（1）
- 各自で自由に散策したのは初めてで楽しかった（1）
- （自分でやる：9）
- 初めての遠出として、ひとりで新幹線を使わずに東京へ行った（1）
- 友達とすべて計画を立てて実行したこと（7）
- 半年ほどかけて事前学習に取り組み実行したこと（1）
- （達成感：1）
- 3000メートル級の山に登り切りすごい達成感を持った（1）
- （不便を体験：2）
- （キャンプで）水を買うなど不便さを経験できた（1）
- （キャンプで）モノにあふれた日常生活と離れた生活をした（1）
- （人生観が変わる：1）
- 現地で戦争体験者の話を聞いたり記念館を見て人生観が変わった（1）
- 〔意味不明：3〕

[519, 612, 624]

(2) 一番わるい経験 (negative experiences) : 女性の「国内旅行」の場合  
カテゴリー1 (危険, 不調, 困惑, 不快.) →緊張発生 (心理的負担の増大)

(悪天候 : 1)

台風で列車がとまって帰れなくなった (1)

(事故 : 7)

海・プールでおぼれかけた (3)

岩ですべて海に落ちた (1)

(自分・家族が) 怪我をした (3)

(不幸 : 1)

父と二人で旅行中に身内に不幸があった (1)

(病気 : 20)

旅行先で病気 (風邪, 歯痛など) になった (8)

食あたりをした (1)

乗り物 (船, 車) 酔いをした (8)

体調をこわした (3)

(不眠 : 3)

船で雑魚寝だったので眠れなかった (1)

夜行バスで体中が痛くなりまったく眠れなかった (1)

昼間の見学内容を思い出して眠れなかった (1)

(困惑 : 7)

迷子になった (3)

道に迷った (2)

履物が使えなくなった (1)

(初めての親抜き旅行で) ホテルが遠く, 大きな荷物を持って立ち往生した (1)

(不注意 : 4)

バスの中で弁当を食べていて, ひっくり返した (1)

途中で忘れものをした (2)

高速バスで降車地を間違えて困った (1)

(混雑 : 4)

(ディズニーランドで) ものすごく混んでいた (1)

(修学旅行で) 人が多すぎて迷った (1)

人混みであまり面白くなかった (1)

長い行列で待たされた (1)

(サービス・宿泊施設が悪い : 8)

泊まったホテルが最悪だった (1)

宿泊先のサービスが悪かった (3)

予約していた部屋を替えられた (1)

(修学旅行で) 泊まる部屋に格差があった (1)

(キャンプで) 部屋やトイレに沢山虫がいて不快だった (2)

カテゴリー2 (まずい食事, 悪天候, 魅力不足.) →娯楽不足

(まずい食事 : 10)

食事がおいしくなかった (3)

(修学旅行で) 弁当がまずかった (1)

ホテルが悪く, 食事もまずかった (6)

(宿で楽しめない : 1)

みんなで枕投げを楽しみにしていたが, ホテルは二人部屋だった (1)

(悪天候で楽しめない : 6)

台風に直撃されて何も遊べなかった（1）  
大雨で思うように楽しめなかった（3）  
悪天候の山の中で行動させられた（1）  
コテージで凍えた（1）

（訪問地の魅力不足：7）

行った先に見るところがなかった（3）  
周りによく演出されたところがなかった（1）  
行き先が交通の便も悪く、買い物するところもなかった（1）  
スキー場の整備が悪くて楽しめなかった（1）  
印象に残ることがなく、ただ疲れただけだった（1）

### カテゴリー3（不仲、喧嘩、気遣い）→関係不調

（同行者と合わず：16）

同行者と好みや意見が合わなかった（6）  
同行者と互いに気をつかい合い疲れてしまった（1）  
（修学旅行で）同じ班の子が好き勝手なことをした（3）  
（修学旅行で）仲のよくない友達と一緒にになり気がつかった（5）  
嫌な子と無理に同室にさせられた（1）

（喧嘩：5）

（修学旅行で）喧嘩が頻繁に起きた（1）  
（修学旅行で）同じ班の子が他校の子に喧嘩をふっかけ、みんなで正座させられた（1）  
同行者と喧嘩した（1）  
親が喧嘩した（2）

（他人への気遣い：3）

他人に迷惑をかけた（2）  
スキーが全然できなくて、皆に申し訳ない気持ちになった（1）

### カテゴリー4（失望、後悔）→期待はずれ

（無意味：1）

修学旅行ならではのというのがまったくなかった（1）

（不十分な計画：3）

（修学旅行で）時間配分が悪かった（2）  
計画性に欠け無駄に過ごした（1）

### カテゴリー5（行動制限、不本意）→自己抑制

（不自由：3）

（修学旅行で）持ち物を制限され、夜も寝ないと怒られるなど、自由がなかった（1）  
（修学旅行で）全行程をジャージ姿で過ごした（1）

（拘束）

スキー実習ですっと初心者クラスでやらされた（1）

[非該当・意味不明：4]

(615, 714) [501, 679]

[[「わるい経験」なし・無回答：15]

(503, 507, 539, 566, 630, 639, 644, 662, 670, 678, 1829) [536, 553, 664, 688]

## Ⅱ-3-(2) 「よい経験」の分析

### (1) 旅行経験の5次元体系にもとづく分類

「よい経験」の内容を分類する枠組みに、佐々木(2000)が仮説している「旅行経験の5次元体系」を用いているが、さほど無理なく分類でき、表Ⅱ-1に示したようになった。つまり、小分類レベルの各経験項目は、中分類レベルの28クラスターに整理され、それらのクラスターが集約されて5カテゴリーが構成された。

そのカテゴリーは「旅行経験の5次元」に次のように対応させることができる：

- 1 = のんびりする。きれいな風景。自然にふれる。サービスがよい。(4クラスター)  
→緊張解消……………24人
- 2 = 美味しい食べ物。野外で楽しむ。スポーツを楽しむ。ラフティングをする。買い物を楽しむ。自分でつくる。レンタカーをする。レジャーランドへ行く。よいマチ風景。(9クラスター)  
→娯楽追求……………52人
- 3 = 友達と一緒にいく。友達と親近感を増す。先輩と連帯。家族関係を強化。年長者の話を聞く。訪問地の人と交流。知り合いになる。(7クラスター)  
→関係強化……………42人
- 4 = 訪問地を知る。本物に接する。戦争を学ぶ。(3クラスター)  
→知識増進……………6人
- 5 = 自由に振る舞う。自分でやる。達成感。不便を体験。人生観が変わる。(5クラスター)  
→自己拡大……………15人

ここには各カテゴリーの経験クラスター数と人数も示しているが、ともに「2. 娯楽追求」と「3. 関係強化」に結びつく「よい経験」がとくに多い。

### (2) 消費経験の4タイプとの関連

さらに佐々木(2000, p.368ff.)は、旅行商品を消費する経験内容を4タイプ(気楽さ、面白さ、新しさ、危うさ)に分けてとらえる仮説を提示しているが、それぞれの消費経験には旅行者のモチベーションや目的地選択理由に関連する主要な心理的特性が含まれており、それは次のような対応関係にあると考えている：

- |                          |         |
|--------------------------|---------|
| (消費経験)                   | (心理的特性) |
| (a) 気楽さ = ①休養、②逃避、③退屈緩和。 |         |
| (b) 面白さ = ④楽しみ。          |         |

(c) 新しさ=⑤驚き、⑥変化、⑦新奇.

(d) 危うさ=⑧スリル、⑨冒険.

そこで、今回の調査で自由記述された「よい経験」が、旅行者の消費経験を特徴づける心理的特性を表しているか、そして、結果的に、4タイプに集約できるか、ということも検討したい。そのために、上記の「旅行経験の5つの次元（カテゴリー）」を横軸に、消費経験の4タイプを構成する9特性を縦軸に配置したマトリックスを作り、そのなかにクラスター（中分類）レベルで表した「よい経験」を位置づけたのが、表Ⅱ-2である。

表Ⅱ-2 旅行者（大学1年女子学生）の訪問地内行動と消費経験に関連づけた「よい経験」

消費経験 (9特性)	訪問地内行動（5カテゴリー）				
	1.緊張解消	2.娯楽追求	3.関係強化	4.知識増進	5.自己拡大
[気楽さ] ①休養 ②逃避 ③退屈緩和	のんびりする サービスがよい				
[楽しさ] ④楽しみ		美味しい食べ物 野外で楽しむ スポーツを楽しむ 買い物を楽しむ 自分でつくる	友達と一緒に 行く		自由に振る舞う
[新しさ] ⑤驚き ⑥変化  ⑦新奇	きれいな風景 自然に触れる	レンタカーを する レジャーランド へ行く マチ風景を見る	訪問地の人と交 流 友達と親近感を 増す 先輩と連帯 家族関係を強化 知り合いになる 年長者の話を知 る	訪問地を知る 本物に接する 戦争を学ぶ	人生観が変わる  自分でやる 不便を体験
[危うさ] ⑧スリル  ⑨冒険		ラフティングを する			達成感

この結果によれば、今回の自由記述データでは、消費経験に関する9特性のなかの3特性（②逃避、③退屈緩和、⑨冒険）に該当する経験クラスターを得ることはできなかったが、他の6特性に該当するクラスター数と人数は次の通りであった：

- ①休養………2クラスター（9人）———[気楽さ] ①=9人  
 ④楽しみ……7クラスター（53人）———[面白さ] ④=53人  
 ⑤驚き………2クラスター（7人）  
 ⑥変化………5クラスター（38人）  
 ⑦新奇………10クラスター（29人）  
 ⑧スリル……2クラスター（3人）———[危うさ] ⑧=3人
- } ———[新しさ] ⑤+⑥+⑦=74人
- 計………28クラスター（139人）

つまり、経験クラスターの数では「新奇」「楽しみ」「変化」の心理的特性で多く、人数でも「楽しみ」を筆頭に「変化」「新奇」の3クラスターが多い。そして、消費経験のタイプで見ると「面白さ」と「新しさ」の2タイプで大部分（91%）の「よい経験」の内容が構成されており、「気楽さ」や「危うさ」に関連する「よい経験」は報告されることが少なかった。

### （3）4タイプの消費経験と「解放感～緊張感」

前田（1995）は、日常生活から離れた状況に身をおく観光者にみられる心理的特徴は、「緊張感」と「解放感」という相反する感覚が同時に高まることにあると述べ（p.87）、観光者心理を「緊張感が強い←→解放感が強い」という連続体のなかに位置づけるモデルを示している（p.88）。そして、緊張感と解放感の程度の組み合わせは、「旅行形態が個人型か団体型か」「旅行目的が教養型か慰安型か」などの条件によって異なり、典型的な場合として、「慰安型x団体型」では解放感優位となり、逆に「教養型x個人型」では緊張感優位になると考えている（p.89）。

そのような「緊張感」や「解放感」はどのような行動によって生まれるのか、その際に感じられる感情の内容は何なのか、という具体的な心理的特徴を述べているのが、佐々木（2000）が提示している旅行者の消費経験の4タイプであると言える。この4タイプを前田がモデル化している「緊張感～解放感」の連続体に関連づけると、次のようになる：

気楽さ…面白さ… | …新しさ…危うさ      （佐々木モデル）  
 解放感← | →緊張感                      （前田モデル）

こう考えると、この調査では、強い解放感にあたる「気楽さ」と強い緊張感にあたる「危うさ」の経験を報告した人は少なく、中程度の解放感（解放感>緊張感）にあたる「面白さ」と中程度の緊張感（解放感<緊張感）にあたる「新しさ」の経験を報告した人が圧倒的に多い、ということである。

このような結果は、この調査の対象者が過去に行った「よく計画され、制御され、安全



な」旅行での経験内容が報告されていることを伺わせるものである。旅行という形で日常生活を離れた時に感じる「解放感」や「緊張感」も、いずれも極端に強く感じるのではなく、それらをほどほどに（中程度に）感じた経験が「面白さ」や「新しさ」を強調させることになっていると言えるだろう。

しかし、旅行者としてのキャリア・アップとともにより自律的で非統制的な旅行を通して多様な経験を蓄積していこうから、強い解放感や強い緊張感を感じる経験も増えていくものと予想され、それが「よい経験」を代表するものになる可能性がある。

### Ⅱ-3-(3) 「わるい経験」の分析

#### (1) 「わるい経験」の分類方式

「わるい経験」は、表Ⅱ-1に示したように、58項目を20クラスターに整理し、それらの意味によって各カテゴリーに分類した。

「わるい経験」の分類にあたっては、Pearce (1982) らの考え方を取り入れるように努めた。つまり、「よい経験」と「わるい経験」の分類について、Pearce (1982) や Pearce & Caltabiano (1983) は、マスローの5段階の欲求階層理論に依拠して、両方に共通のカテゴリー（生理的欲求、安全欲求、愛と所属の欲求、自尊欲求、自己実現欲求）を設定し、「その経験が満たす欲求は何か」という意味で「よい経験」であり、「その経験によって阻害された欲求や充足されなかった欲求は何か」という意味で「わるい経験」であるとしている。

このPearceらにならって、われわれの調査データの「わるい経験」の内容分析でも、欲求充足の「正～負」を表すような視点から「よい経験」と対応づけられるカテゴリーの設定を行おうとしたが、その結果は次のようになった：

- 1 = 悪天候、事故、不幸、病気、不眠、困惑、不注意、混雑、サービス・宿泊施設が悪い。(9クラスター)
  - 緊張発生（心理的負担の増大）…55人
- 2 = まずい食事、宿で楽しめない、悪天候で楽しめない、訪問地の魅力不足。(4クラスター)
  - 娯楽不足…24人
- 3 = 同行者と合わず、喧嘩、他人への気遣い。(3クラスター)
  - 関係不調…24人

4 = 無意味、不十分な計画。(2 クラスター)

→期待はずれ…4人

5 = 不自由、拘束。(2 クラスター)

→自己抑制…3人

(2) カテゴリーの内容の検討

このカテゴリー設定の結果では、「よい経験」の内容と「対照的な意味」を持つものとして対応づけられるのはカテゴリー1、2、3、5であるが、カテゴリー4で同様の対応づけをするためには「拡大解釈」が必要になると思われる。

カテゴリー別に見た経験クラスター数や人数では、カテゴリー1(緊張発生)がとくに多数を占めているが、これは、「わるい経験」の記述にあたって、その現象が直接的に述べられている場合が多かったことにも一因がある。つまり「悪天候」をカテゴリー1とする一方で「悪天候で楽しめない」をカテゴリー2にしているように、カテゴリー1には「不幸」「病気」「混雑」など、それ自体が「わるい経験」と言えるだけでなく、それらが支障条件となって「実現できなかった活動」や「満たされなかった欲求」があるはずだが、そこまで記述されていない回答が含まれている。つまり、より詳しく記述されていれば、他のカテゴリーに入る可能性がある回答が含まれているのである。同様のことは、「よい経験」との対応がないとしているカテゴリー4(期待はずれ)でも考えられ、もっと詳しく記述されていれば(あるいは「拡大解釈」をすれば)、「知的活動」や「娯楽活動」が期待されていたことが判明する可能性もある。

II-3-(4) 「よい経験」と「わるい経験」の比較

上記のように、「わるい経験」の4カテゴリーは「よい経験」に対応する対照的カテゴリーであると考えたが、両者の人数を比較すると、次のようになる：

カテゴリー番号	よい経験のカテゴリー=人数(%)	わるい経験のカテゴリー=人数
1	緊張解消 = 24人 ( 17.3)	緊張発生 = 55人 ( 50.0)
2	娯楽追求 = 52人 ( 37.4)	娯楽不足 = 24人 ( 21.8)
3	関係強化 = 42人 ( 30.2)	関係不調 = 24人 ( 21.8)
4	知識増進 = 6人 ( 4.3)	期待はずれ = 4人 ( 3.6)
5	自己拡大 = 15人 ( 10.8)	自己抑制 = 3人 ( 2.7)
計	139人 (100.0)	110人 (100.0)

この比較から、「よい経験」では「2. 娯楽追求」と「3. 関係強化」が多数を占めているのに比べて、「わるい経験」では「1. 緊張発生」がとくに多数を占めていることが

分かる。この「緊張発生」カテゴリーについては、上記のように、自由記述内容が詳しくは欠いているために多数になったことにも一因があるだろうが、このような「よい経験」と「悪い経験」の間に見られるギャップは、回答者の経験想起の基本的な機能的差異を反映していることも考えられる。つまり、本稿のI-1で述べたように、①緊張解消～⑤自己拡大というカテゴリーは、旅行者モチベーションでの「低次～高次」の階層的関係に対応していると考えているが、上記の結果は、「よい経験」については「より高次の欲求」に関連する経験が想起され、「わるい経験」については「より低次の欲求」に関連する経験が想起される、と解釈できるのではないかということである。

この解釈を裏付ける結果は、Pearce (1982) にも見られる。

前述のように「よい経験」と「わるい経験」をマスローの5段階欲求カテゴリーで分類したPearce (1982, p.129) の結果を見ると、「よい経験」では「自己実現欲求」(35%)と「愛と所属の欲求」(33%)がほぼ同率で多く、次いで「生理的欲求」(27%)であった。それに対して「わるい経験」では、「安全欲求」(43%)がとくに多く、それに「生理的欲求」(27%)が続くが、これらに比べると「愛と所属の欲求」(17%)、「自尊欲求」(12%)などは低率であり、「自己実現欲求」(1%)はとくに少なかった。つまり、「よい経験」については「より高次の欲求」に関連する経験が報告され、「わるい経験」については「より低次の欲求」に関連する経験が報告されているのである。その典型的な形が「自己実現欲求」に表れているので、Pearceは次のようにコメントしている：

自己実現欲求は旅行経験のなかで特別な役割を果たしている。自己実現欲求は、旅行者がその大部分を自己決定できる個人的関心事を反映している。旅行者が自分の休暇旅行経験についてよく考えた時、自己実現欲求の充足は、それがほとんどは自発的で個人的な関心を反映しているために、想起されることが多い。

自己実現欲求が未充足であることは「わるい経験」のなかではほとんど特徴にならない。それは、安全欲求や生理的欲求と違って、他人や支配的状况によって直接的な統制や影響を受けることはない。要するに、自己実現の経験は旅行者経験のなかで特殊なカテゴリーまたはタイプを構成しており、それが生じた場合には高い価値が与えられるが、外部要因によっては直接的には操作され得ないものである。(Pearce, 1982. p.129)

われわれの調査データでは「自己抑制」経験を記述した回答者はごく少数(2.7%)であって、Pearceらの結果に似ているが、「自己拡大」経験を記述した回答者も多くはなかった(10.8%)。これは、回答者が大学入学後3カ月しか経過しておらず、旅行者としての個人的経験がまだ乏しい段階にあることを反映して、「よい経験」の内容もあまり豊かでないためであると考えられる。Pearce & Caltabiano (1983) は、海外旅行経験によって

3グループに分けた回答者の間で、「よい経験」に関連する欲求タイプを比較しているが、低経験者では「生理的欲求」の充足はもっとも多く、逆に、「愛と所属の欲求」や「自己実現欲求」の充足はもっとも少なかった。

現在の大学1年次生も、これから個人的な旅行経験を重ねるにつれて、「よい経験」の内容がより高度化し「自己拡大」経験も増えていくことが予想される。このことは、「わるい経験」の内容との対比をより際立たせることになり、「低次の欲求」さえも充足できないような経験については悔悟や批判を強めることになるのではなかろうか。

## II-4 まとめ

### II-4-(1) この分析から示唆されること

#### (1) 旅行経験の一般的構造へのアプローチ

「旅行経験」のなかで「一番よい経験」と「一番わるい経験」について大学入学後3カ月を経た1年次生が想起して自由記述した内容を分類したが、その結果は、佐々木(2000)が仮説した「旅行経験の5次元」の枠組みによってほぼ理解できることが示された。とくに「よい経験」についてはその枠組みを無理なく適用することができ、また、「わるい経験」についても、「よい経験」の5次元と対照的であると考えられる内容のカテゴリーが、5次元中の4次元で構成された。したがって、佐々木(2000)が仮説している「旅行経験の5次元体系」は、次元間関係を示す「低次～高次」という階層的構造についての検証は残されているが、次元設定に関しては妥当であると考えられる。また、旅行における「消費経験」を表す「4タイプ」も「よい経験」の内容をとらえる枠組みとして肯定的な評価をすることができた。そこで、これら二つの枠組みを、旅行経験の心理的特性に関する「一般的構造」として受け入れる方向で、今後、より発展的な検討をすることができる。

#### (2) 「よい経験」と「わるい経験」の把握について

われわれの分析では、先行研究であるPearce(1982)らにならい、「よい経験」と「わるい経験」を同次元での対照的特性として理解するという視点から、それぞれの経験内容の分類を行っている。この分析で用いた方法には、旅行経験内容の意味づけ(項目化)や分類の過程で主観的判断が入り込む余地があるので、より客観的に経験内容を分類する方法を採用する必要がある。その方法として、どのような手続きをとるのかを検討しなければならないが、とりあえず、内容分析の一般的手法である、複数の分析者による判断結果を照合する必要がある。

「わるい経験」の分類については、この調査の自由記述データのように、その経験を生じた直接の原因である事態や状況だけが述べられることが少なくないと思われるので、そのような事態や条件がそのまま記述されるのではなくて、「わるい経験」の内容がより具体的に描写されるようにすることが必要である。基本的には、自由記述の内容を豊富で詳細なものにすることが重要であるが、さらに、今回用いたような一般的な質問紙法を越えた調査・質問方法を採用することも必要になろう。

## II-4-(2) 「旅行経験」分析の展開のために

### (1) 研究テーマとしての「旅行経験」

旅行者行動の心理学的研究の理論的枠組みのなかで「旅行経験」はきわめて重要な位置にある。つまり、佐々木（2000, 2004）が描いている「旅行者行動の心理学」の課題領域の概観図（p.379）からも明らかなように、旅行者行動における「旅行者モチベーション→意思決定過程→実行過程→旅行経験→旅行経験についての評価・満足」という連関のプロセスのなかで、「メイン・ステージ」に当たるのが「旅行経験」である。その「内容」や「水準」が、モチベーション段階で期待された内容や水準と照合されて、旅行後の「評価・満足」を左右することになる。このように、旅行者行動の成立過程における決定的機能を考えるならば、「旅行経験」の内容を把握することには大きな意義がある。

同時に「旅行における消費経験」は「生活価値」の実現に通じるという、やや「マクロ的」な視点から「旅行経験」を意味づけることができる。

現代人の生活意識の変化の方向について、佐々木（1986, 1996）は「空間的内容の充実→時間的内容の充実」と「物質的側面の充実→精神的側面の充実」という二つのトレンドがあることを述べ、その組み合わせのなかの「時間的内容の充実×精神的側面の充実」というライフスタイルを「活動重視」と名付けている。この「活動重視」は、「自分の経験を通して自己向上や創造的な生き方をすること」であり、現代人が「生活価値」を追求する場合にとくに重要なライフスタイルである。そのライフスタイルを発現する行動領域の一つとして「旅行」がある。つまり、われわれが課題にしている「旅行経験」は、現代人の「生活価値」の実現様式の重要な側面を表すものである。

### (2) 「よい経験」と「わるい経験」の生じ方

われわれのデータも、またPearce（1982）らの調査結果も、「よい経験」と「わるい経験」との間には関連する欲求レベルに違いがあることを示唆していた。そして、高次レベルの欲求の充足は「よい経験」と認知される可能性が大きく、また、低次レベルの欲求の阻害

は「わるい経験」と認知される可能性が大きい、と考えられていた。この原因について、Pearce (1982) は、自己実現欲求の特殊な機能を論じた際に「旅行者自身が自己決定できるか、それとも、他人や支配的状况による統制や影響を受けるか」が問題になると述べていた(Ⅱ-3-(4)参照)。そして、Pearceらは、「わるい経験」では「自分で決定できず、他人や外部状況によって生み出された事情」が原因になる可能性が大きいと考えていた。つまり、そのような外発的原因が欲求を阻害する場合には、高次レベルの欲求に対するよりも、低次レベルの欲求に対して強く影響するということを想定しているようである。この想定は、マスローの欲求階層理論にもとづいて旅行経験を理解しようとする場合には、成り立つ可能性が大きい。なぜならば、低次レベルの生理的欲求や安全欲求は「欠乏欲求」と言われ、それを充足するためには外部的条件(他人、環境など)に依存する程度が大きいからである。

しかし、われわれは、マスロー理論によって「旅行経験」の体系化を図ろうとしていないので、「原因が外発的か、内発的か」という視点に関わりなく、もっと一般的な説明原理を模索することが必要であろう。その仮説として、低次レベルの欲求は「充足されるという期待(実現見込み)」が高いため、それが阻害されることに対する「失望感」が大きく、「わるい経験」として印象づけられやすい、という説明は成り立たないだろうか。

### (3) 「旅行キャリア」による経験内容の変化

「旅行キャリア」をとらえる操作的方法が必要であることは言うまでもないが、この概念は「旅行経験の蓄積度」を意味するものであるので、旅行者行動を理解するのに有効であることは間違いない。そのキャリア・アップは旅行経験の多様化や高度化を伴うであろうから、そうした経験内容の変化をとらえることは「旅行経験」分析の重要なテーマになるだろう。われわれの今回の分析は、「旅行キャリア」の低い大学1年次生のデータを取り扱うものであったため、家族旅行や修学旅行における経験が多かった。しかし「個人的な旅行」の経験をこれから重ねるところであると思われる。そのため、より豊かな旅行キャリアにおける経験内容に関しても今回用いた分類システムを適用することができるか否かを検討する必要がある。

## おわりに

### (1) 基本的視点は「脱日常性」の意味を探ること

「旅行者モチベーション」は旅行の実行前の目的あるいは意図に関する要因であり、「旅

旅行経験」は旅行の実行中や実行後の実績あるいは評価に関する現象である。これらは、「モチベーション」を満たすために実行された結果が「経験」になるという形でつながる場合が典型となり、さらに「経験」が「モチベーション」にフィードバックされることもごく一般的であるために、旅行者行動の過程のなかで相互に強く関連し合っている。そのため、ともに、同じ心理的特性（コンテンツ）から成る5次元体系で把握するという仮説を設定しているが、本稿での分析結果は、それを支持する方向を示したものと考えることができよう。

しかし、このような「モチベーション」と「経験」に共通の特性は、旅行者行動過程の枠内で考えるだけでなく、それぞれの呼称（緊張解消、娯楽追求、関係強化、知識増進、自己拡大）が意味しているような、旅行を通して「日常生活（＝ふだんの暮らし）」に変化をもたらす機能的な側面についても考えることが必要である。これを「旅行の効用」と言うことができるが、それこそが「人はなぜ旅行するのか」という問に答えることになるからである。つまり、旅行者の「モチベーション」や「経験」についての理解を深めるためには、その人の「日常生活」での価値観・欲求・願望・経験などを知ることが重要である。佐々木（2000）が『旅行者行動の心理学』で用いている概念（p.79ff.）を使えば、「補完・転換・改観・創観」の「内容」が問題になるのである。「旅行」の基本的性格は「脱日常性」にあると考えられるが、その「脱」の意味を明らかにすることが「旅行者モチベーション」や「旅行経験」にアプローチする際の視点として不可欠であろう。もとより「脱日常性」は、旅行以外の生活行動領域でも追求し経験することができるので、そうした領域との機能的な補完・代替の関係をすることも重要である。

## （2）調査研究の当面の姿勢について

本稿は、単純な調査データと素朴な分析方法から得た結果を報告するもので、研究としてきわめて初歩的なレベルのものである。しかし、その執筆意図は、「旅行者行動の心理学的研究」の現状に照らして、筆者は、①調査・分析データを公表して課題意識を広めることが必要である、また、②そうした調査・分析データがなんらかの「仮説」や「命題」を中心に関連づけられ蓄積されることが望まれる、という考えから出ている。

このような基礎的な考えを示すのは、旅行者行動の心理学的研究がようやく歩み始めた段階であると認識しているからである。確かに、このところ、この領域での調査研究が次第に広まりつつある傾向を実感しているが、この傾向は、大学などに所属する研究者の間で見られるものというよりも、民間の調査機関や旅行会社に職を持つ専門家の実務的な仕事や、大学院生・学部学生の論文・レポートのなかに見る機会が増えていることから伺わ

れるものである。ところが、民間の実務的な仕事や学生の論文は、成果として公表されることが多くないので、貴重なデータや面白い視点でもそのまま埋もれてしまう可能性が大きい。そのようなデータや視点が、たとえ単純で素朴なものであっても公表されれば、時には専門的研究者への刺激となり、この領域の体系化のための素材になることがあると思われる。

そして、そのような刺激や素材としての「効果」をより強く発揮させるためには、そのデータや視点が「なんらかの仮説や命題」に関連づけられる内容のものであるに越したことはない。そのような内容のデータや視点はそれ自体が具体的に焦点を定めたものになるという個別的メリットがあるだろうし、全体的には、関連づけられる仮説や命題の数やレベルによって旅行者行動への関心の所在を知ることができる。そうした関心領域を中核にした体系化を進めることが生産的であるが、一般的には、より多くの調査研究的知見がある領域では、たんなる「量」ではなく、「質」のよい知見を見出す可能性も高いだろう。

「旅行者行動の心理学的研究」にはまだ着手されていない課題も多く、知見の集約や体系化も不十分であるが、それだけに、発展可能性が大きいと言える。より広範な研究者・専門家・学生の参入を期待するものである。

## 文献

### 〔序〕

- 石澤 章子 (2003) 海外旅行価値尺度の構成：大学生の動機を探る。関西大学社会学部卒業研究論文。  
Naoi, Takeo (2003) Tourists' evaluation of destinations: The cognitive perspectives. *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 14 (1). 1-20.  
西村 祐子 (2002) 旅行目的地のイメージの共通次元の分析。関西大学社会学部卒業研究論文。  
佐々木土師二 (2000) **旅行者行動の心理学**。関西大学出版部。(第2刷 2004.)  
佐々木土師二 (2002) 海外旅行に関する大学生のモチベーションの実証分析。  
関西大学社会学部紀要, 第34巻第1号。219-243。

### 〔第I部〕

- Fodness, D. (1994) Measuring tourist motivation. *Annals of Tourism Research*, 21. 555-581.  
Gitelson, R. J. & Kerstetter, D. J. (1990) The relationship between sociodemographic variables, benefits sought and subsequent vacation behavior: A case study. *Journal of Travel Research*, Winter. 24-29.  
Guinn, R. (1980) Elderly recreational vehicle tourists: Motivation for leisure *Journal of Travel Research*, Summer. 9-12.  
石澤 章子 (2003) 海外旅行価値尺度の構成：大学生の動機を探る。関西大学社会学部卒業研究論文。  
Krippendorf, J. (1987) **The Holiday Makers**. London: Heinemann.  
Lee, T. & Crompton, J. (1992) Measuring novelty seeking in tourism. *Annals of Tourism Research*, 19. 553-575.



- Mills, A. S. (1985) Participation motivations for outdoor recreation: A test of Maslow's theory. *Journal of Leisure Research*, 17 (3). 184-199.
- Pearce, P. L. (1988) **The Ulysses Factor: Evaluating Visitors in Tourist Settings**. Springer-Verlag.
- 佐々木土師二 (2000) **旅行者行動の心理学**. 関西大学出版部. (第2刷 2004)
- Schul, P. & Crompton, J. L. (1983) Search behavior of international vacationers: Travel-specific lifestyle and sociodemographic variables. *Journal of Travel Research*, Fall. 25-30.
- Shoemaker, S. (1989) Segmentation of the senior pleasure travel market. *Journal of Travel Research*, Winter. 14-21.
- 〔第Ⅱ部〕**
- 前田 勇 (1995) **観光とサービスの心理学：観光行動学序説**. 学文社.
- Maslow, A. H. (1954) **Motivation and Personality**. Harper & Row.  
[小口忠彦訳 (1957) **人間性の心理学**. 産業能率大学出版部.]
- Pearce, P. L. (1982) **The Social Psychology of Tourist Behaviour**. Pergamon Press.
- Pearce, P. L. & Caltabiano, M. L. (1983) Inferring travel motivation from travellers' experiences. *Journal of Travel Research*, 22 (2). 16-20.
- Pearce, P. L. & Moscardo, G. M. (1985) The relationship between travellers' career levels and the concept of authenticity. *Austrarian Journal of Psychology*, 37 (2). 157-174.
- 佐々木土師二 (1986) 生活者行動の変化：マーケティングの視点から.  
『経営と情報』大和銀行, 通巻155号. 2-6.
- 佐々木土師二 (1996) バブル崩壊と消費者意識.  
久保村隆祐・流通問題研究協会 (編) **第2次流通革命**. 日本経済新聞社. 295-307.
- 佐々木土師二 (2000) **旅行者行動の心理学**. 関西大学出版部. (第2刷 2004)

—2004.10.19受稿—